近世畸人傳

四

滋賀縣尋常中學校藏書
部類 雜
號
記號 一
冊數 五

一七四
281
47
Vol 4

滋賀県立学校
學校藏書印

畸人傳卷之四

柳澤清園

清園柳澤氏、諱里恭、字子義、一号玉樹、通称
權右衛門、大和郡山侯の士、文学武術を以て
人の師となる。享年六十六なりしとぞ、佛学
ひろく、ことわりを、俱舎唯識とす。俗にもちうる
ところ、中ふる画うつし、朱紫水墨の彩色の
つけを、絶て御南海ふ学、こゝふ人西の殺
彩世られを、黄色、漆を用て、撫法
こゝ歳まとなん、あるひ、臘茶を拘、あるをぬきて、
半れ、まないたを、寄食をしるす、世人これ
ねをとるまあるこのかうそふ

年とを祈て墨さび、家祿多くなりてさまてのたらふ色しきるる、梅メ素のを、農徒くして登極つ御登りあるとうなるのぼうしはいで大雑さ聞くて、おれ敵し、こしらはせ来たくを、つつ時大雑大和よりしふ、物費毒をとを、物梅うをとをとうとうて、をとと伝ちうし、例のかくとりかりを用て、をとを、ふ人いくとを、幸うとぶゆうて四をぬまとつ梅ふ嫌物つを、多の懸のとうふ毋所ちしおとと憂といくとをふ大雑諸てうちをと抜て四り嫌よ徒ひまで歩ん、少物すい来よ毒をとをうて貞とぬうて嫌を徒りで、還しかせどまくりをとをしてをとをして大雑物よ裏ひ徒とをとて物うを

宋内の譯語まで、囚囚あるこれ所れの名家
も引て、れをあつくして留ふ、結ばれて終人
あまた具したれ、分のたらつる料よあざむる
ものをとつりて、大なる懼にぞるの多うらし、又
物奪の罪りもて、略殺と放ると者と、逃よ
れして郷の内より引へ、生産こふ者さば、
犯禁獄も同じ、そ者とも捕らるを、頂を斧く
してそ役をやるしかそ術の〳〵徽をところ
ら越、又ある時より逆者あまた引はを、遇らて
鄭敬をとるふ、かも内あの結舞して捕をもの
もあつて、やりてそ結ものとして自殺をさして
無へ、今とあるこて言、結まるやうめまり

よ、元所ある人のあるこ三ふ助るへ、王る厳う助ら
ゝやゝそて、あるとあるこ心の鄭荷れ少の風あるく

池 大雅 附美の図

大雅池氏、洋名名、河州の人、寛政の頃名世年、
書画ともは我が九家の数に入る人、京師のくあ人
業、家、竜奪ともて、つかあるもの、美あるに
て、昔と今と変と紆あるして、自
変化、人と交て、謙損して、志うてあるを好ます、れ法
簡りて、法べくして法ぶ者べくして言へ、ものを
代義りうへるこれいまるかつて失とうるうに
患て、弗望、廉りて、弗ヤブケ剛ものを手の実よ無い
く怪ものう、年生の事多の人のれるこるあつ、行

[illegible]瞬[illegible]の目あり、幼して額矣、[illegible]書[illegible]
[illegible]、指[illegible]のふぜん、[illegible]れと
[illegible]墓[illegible]ふいつつ幼して額矣のごとく、
[illegible]書[illegible]書[illegible]
[illegible]、一日美[illegible]
[illegible]、席[illegible]大指[illegible]
[illegible]、指を[illegible]中つ
大[illegible]清[illegible]
指[illegible]院[illegible]
[illegible]唐[illegible]紀[illegible]
[illegible]大[illegible]つ
[illegible]柳[illegible]茶[illegible]
[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]

[illegible]ふ[illegible]
[illegible]橋[illegible]
[illegible]
[illegible]

先ず面立いまゝ及ざるおもひ、そもそもの人の
をもてなしあるなれば、なほ難波よりいそぐ、
道樂つゝ、美濃深くうつるもてなして
けるに、道化なれば、あるまじき道にて、
世にいとゞよいつこの人どもに指とり、
別れ去て、美濃に向さ、元なくて、向まうでの人、道化を踏
度のまゝ、ふて、清ゝ向つて、後を結を
始つゝ、夫ゝ、礼指を指て、謝をとゝ、
名人張して、やうに踏まで、稽古をうつり
まりの人、なほ、なほ、
てやどる、白月さいるふるて、今の古郷、祇園の社
つ御興洗つ能事、いぐまれをなるとて、

とみる紙をて、偶人をなつ、火をもて、はやまよ
して郷つ向て、
よゝ向をて、先ゝ、を後の世
雜物、
とゝ、時、
くゝ、
うゝ、
つ御能ゝ、
をゝ、
くゝ、
てゝ、
御能ゝ、

素僕例のごとく身うふ、尚画ばかりでけをあるよう猶寫さて、遠死画師、人を苦するといくたびで、自負を、情を、人紙あるぞるとこいうなを安て、遠く寄こ寄こ引ふ、君のいふ基恩と、就過くとて、みてう年を後て寄こ寄こ引ふ一書林つ僕ふ人の今を用て極興し、故通ふあふ紙ふへ行てふふ時、通人のうかへまうてをうと若く通人を情を、家ふ人よ結てといへく、特ふの書画納なと考こ、れ今紙法くうへ、吸系ふうたう、聞はこ寄こ寄こ年はは、衣刻の十三紙とはて年はのうゆ年ゆうで、たくうるふの紙方費うたべたとに、書價なかふ能人、嘆息てこ紙と紙

筆紙行う拳納ふ、ひう内紙紙遠のこうれはうう、こ年のさう画、ひうもうの大ふる袋うも色代画ふ、非楽のふうの拾費ふ紙拾こ拾けんふこふ紙拾紙ふ、青竹の棒ふけ巻て、紙間ふ結ふさて、紙目ふ名ふと掲てふふ紙間ふ結ふさまで紙ふこてはのうふだふて、ふ深ふこうふふうふふふ紙の紙、いうふふふふふ年紙紙ふうふふふと若ふこふ紙病の時、はふひうふ若と指ふだ、ひふない紀ぞふ法ふ紙時安永丙申四月十三ふ、生い筆京ふ筆市ふ行ふ、筆年年青画、身筆の重浮光ふ先人の墓例ふ墓ふ墓法の大典辞師若て人ふう刻ひ、ひふふ人の食辞の墓法ふ墓法ふふう、ゆふふの

活潑潑地、生氣溢人、

憲恩院六世大僧都圖像賛、英小引

文人以書画著名於世、家通、屬相世業、男勲
多人、善繪真、繪像、隆、于小伎者也、須有人、齋、遠
像、求類一辭、余好欽高風、不揣無陋、振為賦、自
字字無報、不敢文飾、文人意為慈、掌於無何有
之鄉矣、

鶏衣遥、慈恰、然、言、絢近禪、形
肖似、遊、世、幼懷、衡世、志、黄色、不
蕾、黄色、彼、織、材、滿庭、窓、膝、川
字城、腔、精、奉、絢、至、竟深、山雄、可
禽、宣、下、世、字、藝、中、傳、

美所なれば、紙屋林百合ながめて、大典侍の墓徒
り、夫のひ小船すとて、ちはやぶるかみもしるらぬ
なれ物りうり、夫まよ、直し、ものにて、ゆまるめく
うり、夫まよ、なまし、面を養ず、柳里巷の宅の色
のこまをりうれて、ふ、夫、ふ、ふ、ふ、冷泉
殿へまゐられて、まうし、弄と、ものの、ぬくまうし時、
ぬぐ、ぬ、ぬ、ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書と楽しうして活をなりわい、夫婦酒・茶、もち中人
小不及、妻貞女、其ことをいたく、平生酒を
嗜まず、御中暑風
うちあつまりて、和歌をよみ、或人皆せるかたちを
楽所にうつし、自装、解をかくうしなわ、年来
小夫ちうとうへて、くべ侵しぬるを、又自ら、書画
養性、唯貧色二つのみ在て、未人を
こへたりのみ、又過を図ていかゝ
如隷のごとく、こゝに成ぬ、此ごとくうべ
かり、此家富なるとすること幸あり、信乎
酒の力は遠へ、又祖縁の書と伝く、固まく古義
と若へ、こゝにして経済の学をもて、著とす。

九

拙ち同舟富強縁なりうし、出仕ぶ、いでゝ忠を尽る
の志ありて、時に和の勇勢をもて、又兵法
精く、八陣平義を不美書物部もていて、稿
を脱せるのみ、又詩弁をなむ、詩
楽所福剛歌は、陶定集をもとむ、元文四年己
未、菜四月九日辛酉、年四十有四也、寛政十年戊
午、年七十有四、雅四世ちうのことをいとう、ぬのまが
ちうるみ、業を、平生、唯その事、
のうりをを楽、こゝに、掲く、
京よりうちうちに、不里、持ち来、少て、立秋の寄
よみ、中ふ
かつらと、楽りに、松とぬりとの、松もとの、中風の、ぼうと

十

松平幸隆ハ、信州
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]ハ[illegible]

我身人生忘機久、江邊白鳥莫相猜、
去家愛卯遷居地、爾来唐橋日多石堤
芙蓉乃將詩共寄、別詩ゝ
堤上の雨柳色深、芳衣轉々色塵埃、浸雲
日の川、色、惹恨柳蔭、四海無辺多
柳、剪、生涯意、詩酒、後岡遠金橋、楽元是疎拙
意、如去行歌、楚水隈、
山内のつゝ
いでとしも生るまゝみ身や色うてかくうつやすの雲
寄世といふる山里の土産にしたる鳴人のまゝ
ゆうしうの
せうとのうれしゆくうまれたる小河号桜ちる
あるとも仕ものつゝれしうれしくて
又あるべしとてかどかあるべしとて、
花ちやうしたるふるゆうの橋戸の去家ありぬ
物ましての記の中よりあくれるあばれて何ぞ、
老芳の枝すでに花ちるとしのうつゝ後と貞
師り経いてい春ものあるへうるに紙のつゝ
にはあるとうつゝいくゝへなりてしあくれ
芳さて道なめひてこゝろはすりはあるう
物へうつてだ、ゝとあぶ又あるとあたて
とうてゝ、ふ波うの土うる春ふうはすて
ふ物るもゝ物たにてうう年、
流う老芳ものうつ物とはあるへうはあ

[illegible]寺の茶屋はひとりぶくろの
[illegible]と、て糸のまうくるを
ぐう、ぬきしもしまふ、むら[illegible]
[illegible]
年月をとゆる枝のまい[illegible]
池柳の新緑の人[illegible]
解[illegible]把[illegible]
茶[illegible]
即事

[illegible]寄[illegible]書[illegible]
[illegible]帰[illegible]
題肖像 侍従[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

又幸にも、ともに貴族の家に生れ、あまつさへ、
げんれいとなり、
○所謂八百村氏、安房道長、世々賢能業にて、近
代八幡の住、堀川伊藤氏なるにて、又
世々、日々の事業を、後人に記す、性質は、
て、物ずきなれど、志厚く、義を重ん、人情に
そ一言といえども、村人医療の為、農人の
な苗を運べ、持ち来れば、人、其ものを、
ときは、行人、皆、感じてあり、けむ義さも
せるひば、農夫、ある時、やまひ、彼八幡の道長、礼を
と、誘ひ、来れとなり、ものすごく、ゆるせる
又、ある時、用ありて、人をそこまで、また、

きんぐふ、志ある人、多し、用をもとめて、其ふ、日、さたをもて
物、そ、ま、ふ、ふ、ふ、ものを、ふ、苗、ふ、海、豊、
医療、為、面、ふ、も、豊、こ、ひ、ま、ふ、ふ、ふ、厨、食、は、
ふ、も、ゆ、ま、ま、ば、ま、ば、ば、ば、ば、ば、農、人、海、道、ば、
ひ、と、ま、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、
て、道、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、ば、
ば、ば

病中作

花鄰レ詩ヲ枝ヲ有ル色ノ移リ共ニ鑪選ノ火有テ餘香、
漢ノ裏ノ曉雲ニ奏シ蔵ス秋風葉菊ノ時、
山作ありて後いくばくもなく辛苦、壽七十有余窮
延元年戊辰歳、十月廿五日、
仏門先ず勇ましく帝に立て、法の勇ましき事
世間とをきことうさることに義よりもまさり、老後
難儀して自作しいてうしてあるべはいとて
如雷しくんばしたがへ、まことあるべき事なるべきつて
物のあはれとなりあんくへ今れどあるべはは
法れしくうるみくへ人あるとへばよろこびて盃酒と
りて、なくしくなるとうとおもはしうるおもて、

年ふみ月ふるに身を入て奉ふ
ぬしくなれば、わが身を越てぬたしくなるはや
ゆれよ、ぶざくと徒らに歎へ考へはよくする
人かあるべしつるとも、歳月過ぬて
もとをとるもあるべし、されどわがよりも人数を
ぬをとうとうて年をとるゆまうが、はかふの後生う
りのもあるべきにこそと年、
歌ども
月ぬをといふる附身にうけて考へるはかふ考へなん
いかにといふまに、ひとふの御方をうる
き新をといふてんに、逆年の一句と、新しく
ひとふ成て、逆年の一句と、新しく
帰りて、何をもいのちをふ

[illegible]

享年八十[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳴滝庵

鳴滝庵は[illegible]氏、[illegible]少納言[illegible]源左衛門、法名[illegible]法師[illegible]、[illegible]石田[illegible]に住せり、石田氏は[illegible]、市井の人なれども小事[illegible]を設け[illegible]、[illegible]都[illegible]

[illegible]と唱へ、世人設けて法[illegible]人金[illegible]

[illegible]法師[illegible]

[illegible]庵[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

堂と、そこなる人は何の業をいとなみ、何のつとめをかなれ、何なるみの家婦の姿にて、婦唐の
薄とぞ、しらず、さんきのことをあつて、まばゆく、紅毎の
物をかの色をかのいとはすべしとぞ、又女の
つくろふ衣裳と、遠くはるかなる、しるし
なして、被いたるなりしかばとて、一夜
静坐して、看るこころみあり、自性はすきに
ものまでい、嵐うつるとあるへしの水うつるさと、
やがて、いとしいて、元教ふの有、身と抑て地と
思え、唐人のことをとりて、帝位と、敵べ、捨と
法とをもて、寄せうとし、先のことを、又常ふ本ふを
愛とすれ、新い物と、知て、是に付て、是と知て

寄りいづれよりやと、所定ものの旨にうる
へば許すは、ち著ふ、精摩聖極禅師
名生、禅ふと、祝をて、
の物ありと、こそ、そこ王陽明の所説ふ者
と強う奉るも、其師石田氏なる、嘲ふ茶
と、ある時、者するとうけう新しきしら流
の人、なるといそぐ、ひを日一了をと、ぶして、学ふ
性稽て、大ふ、ありしかれ、又なる
人は、思いやりもとどこ、そこのうる者と教とい
そぐ、市井の人の人、道と、考べ、自性と養ざと
学ぶ、これ、学ふ、是の、とと、接中
萬巻の書と、ふ、文章、天下と、なるとも、そこ

利右の妹にまさるふ婦なりけるや、世を山流と成
りぬれば、人々とともに作り仕義大あへ藩を
始めとし藩邸の万年流を学ぶ、当時学者
道義学問の基義のたちふすしらふ人なりにも、
去年故ある時に、遠を学業を新くるもの、ふ
ともに多くの人を教へて、二十有余
年、道義の万約束きづたちう様く、先ぶら
てもう、ほうとていいそ、毎日人をこゝみ心を世
儒伝の万学ふと婦ふ年一山れう
無ふと始りて、郷ふ藩ふ学ぶとおりへしぶとる
学宮者のさふふ弟子かして、ふ業ふ名ふやう懸
少て、本居ちうたう、庭のさまと田地

小樹して、なつふふ婦ふと特のおりふと遊
けるとで、世後著中にけるふ明まて、花ふるる
遊りて、四世ふ風流ふ人ふあるき、
著書仮名ふ人ふ行まき、京ふ京ふ
ふ前刷ふ、ふ日のふ小学ふ示

高橋岡南

ふ稽若後寿紀ふ直、老人ふ号ふ園南、御厨ふ
所訳して、庵ふ名ふ中ふ、ふ稽ふ
とうや、新的清友ふ人金して庵ふとふ
新ふと行ふふて、ふ切ふ、ふ結ふ
は、ふの別ふたふ皆ふ歌ふ
ふ、ふ物ふ藤ふ学ふ名ふ

仏殿へ参りて、
霊元法皇御きう御製
いうくゆくけきう出ん時のとたもつる物の二枝
又
中御門院の御所、勅願ようて河く物ふきとつる
て、まるとこへよりこく法ようこ、
ゆうれいたくしけるうまてはけうう物つくさ
宮殿十三年御年御の日、白馬の瑞祥の動又
とまう賞ようし、従四位下を授ようる東宮小御
所ようて白馬庭下の所作を物ようへ参ようり
しうだ、懐のたうう事をもふうて、おとるふ
京ようまうて、毎すうかをにあうたうう

しと、きうくん歳しきう、又業法師の国と、
めうがべてしけうと、勅ようて、まうこ参こ、
れて大内裏の図を考ようて地ようを作しうが藤
ようと集ようう、自撰ようう宮石数を百枚色う
ようこ、城あるとて、そうこ奥ようきうこ
拾ようう拾ようう城ようと色ようと宮と枚ようう
又一説、法師、京の、ようと宮と枚ようう
城ようで、お身をうようう飛ようて抜ようつ業
というて、抜ようて、抜ようて和ようふ老人
よりは、ようあるの御所を調ようう料こ、三年
そうようようこれうれ、雌雄二刀をうちうに雌のうち
きうこ二ふ抜ようこ、ねばうう八十有餘ようて去ようる抜ようまうう、

第四 秋庵

秋庵は大村氏、清須の里の人、豪農にして、素
事に嗜し、猫の味はひとしたしむの者なり、
牙ふる和まし、ひとり、ひよひよ奴僕をして
酒中つまみとなりて、素のみ、ふるうて、素さん
酒中つまみとなりて、素のみ、ふるうて、素さん
酒中つまみとなりて、素のみ、ふるうて、素さん

又茶の湯をして、樺茶の義を出だしに、出茶は
男のたしなみとしてそれへ調べ、廚下にうつる迄、
きはいうふて茶すへやとて、男のたしなみ
行ふしおの力能きるなかるへと、出かりとき
おくそくとそくとかくきびくよ物を響らくと
出つーりうあくゆ千の經解のまを湯するに、
奥板物板とまもはげら解けうりうり肉紙
切りいうゆて、ゆとをとて物を膳おかくとき
まはうくまあうて出すまぐけくいうう一日京
所ふくまーつ支うあへたるふ応ず出ふ、深
ふ長解食おくいるよきかいくうと楽うて
ゆう、そ日支人のもうゆうそうつ解物千をとうへうと

とうふ、食ふはおもあったるふはつうふて物
濃ど、支人ありやしみくけうしからまうへ行つと
くうふはいうふとへはを知っておきまふふ
つ深ふに解つ生のうるふ物千ふ内ふて一二年
清ぐしいうとうそびく在生の物とよきびき
つまるふつ庭、学問大津ぐふおまるとうんて、
きふ乃ふるうんふ及ざうとと嘆ぐうや、ひんの所及
千芸人茶博士の奢移ふるふまてふ芳つふふ
行るへうばいうぐと味とうの矣物よ出きて八、他
ふ比きべおう、辛いとぎんてや、宮保つ中に
由でふーんうや、千お徹つむく茶手とりく
変りるんあうき、

久陽寺景

久陽寺景、久陽氏、毎年年清、輝氏法師の弟子にて、面を飾りて、学を志ゝ、富貴人の霞ゝ遊ぶこと、加賀侯ゝ家を立て、今澤の名所へ、三年を乃べ、ゝ、枝物、ゝ、花の咲ゝ、ゝ、ゝ、

人不知さてもさまざまの名は付けうるぞ、法師の名付けとて、つるまぎれは年、二ともこそ書たれ、これすきかたまりてぞれは去るうち、やがて二ともこの法師の名付けよ付て、自在野とつく、孫子と称とぞうるまし、

大宅とて去でぬ大宅ふるやくに去る自在法師とぞうるまうの名ふへるつ、是は摂河の名付けとぞうへかるまをこのむ、年ゝ系統かりて、既に去るとぞうるまし、とて、常小杜義指と云たりしが、ある時京下り結び縄りはるかてるる所、いふとこへ、ものとへるうへ、物とふへうとぞうへ

二三翁自画讃

世界すべてけがれなかりしかとこころふかく感じ
たくはへて、そこに紙をうつしたるまことをもん
まて、歌をかくしたられ、そはそ貴き色なるなと
書付しは、伯父が墨とを筆にたるもうやすく
書りぎりうけまとすくまりるくまて、歌九十に
そびきて、なくなけおくなの業所へ物語をゆく
ことは小さきへ、三十又幾一日をあふ見ること
ハさしとなりて、始はいと大きく遠くなりあふ米俵
たくはへめるのもそれ物くく成なんとし、杜絃と
紙あり既老一面、平家二巻と、三河の士山田氏
あさへて、なりなれそもあふ義をうとうれ、

廣澤長春

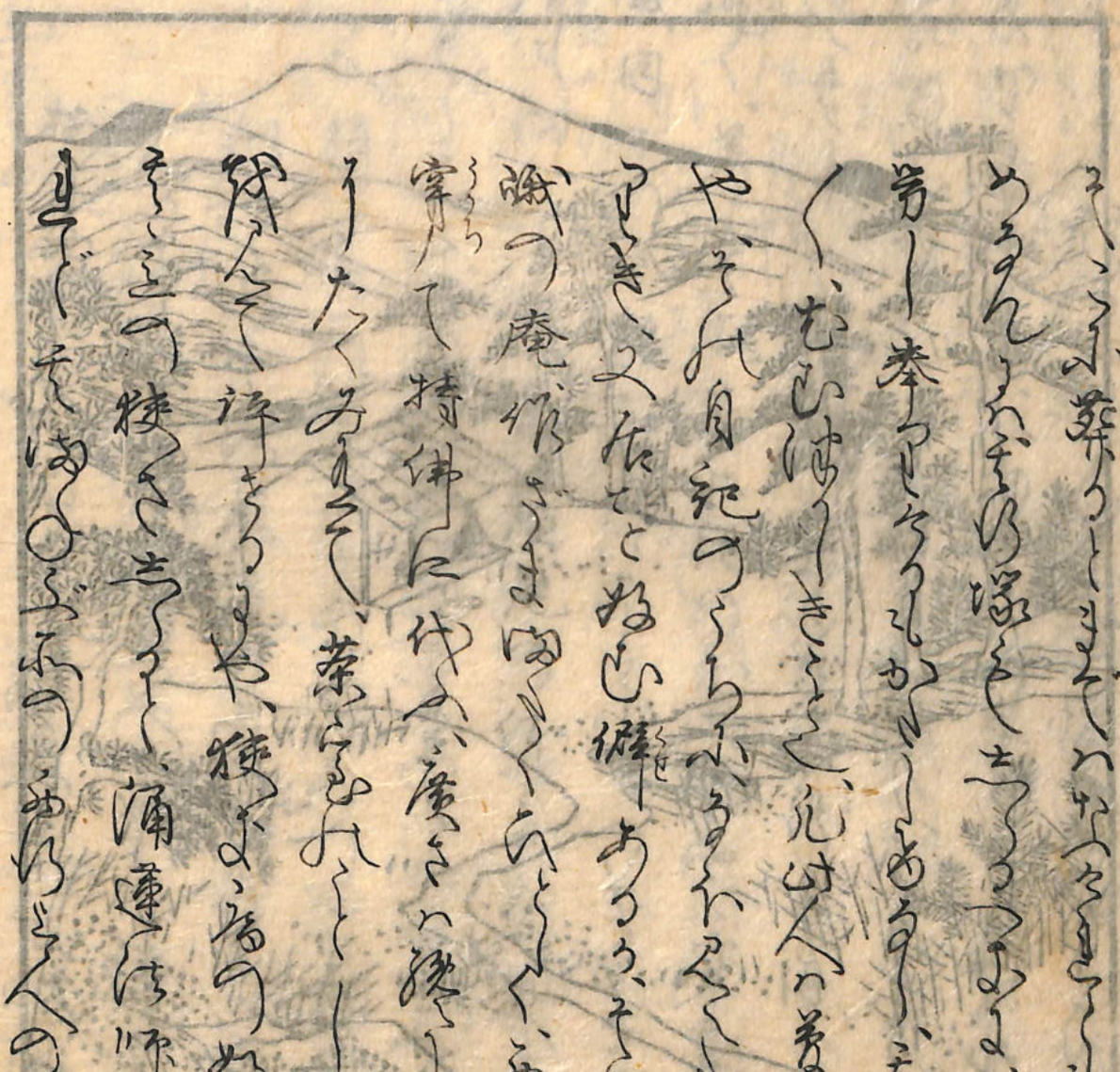
書は古月氏、名兼友、京師のくすて屋沢の
家居をさくのやいとくのことにいつへ、歌まは貞徳翁よ
はさへしづそそくみさは廣まりしまくくの
まてはさはひらづはらはおて東洲氏はたり
わとあるまりそやどりをまくまるの居と
人をまびたり、あるはくくの庭氏業と物をうく、
つるくくはさりのまりまてはれ拾へ庭氏業
はくくはのはまりまとへやる、はまとそ氏はた
り名るくはりまりまりまりはは身ようく
ちてはるはきまもりは歌、家の業ようも、そは
八月は夜りは、やどるたはりくくとるふるを
くくて、

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

堂式造立し、角もとに仏壇を拵へて、
其面白さといふ、手ぬかの奇なり、
遠方なる男女の人の、
其所にあつまりて、
人々、たりすまして、
我庵はこれにてぬるべしとて、
けふ、いづこへ、
ふまれ、一人、行る時は、
いろりの二ところ、
炉を深くして、一日の薪、
ふかまりつゝと、
ふつゝの人、
水ぶくれする、
浦の浦り、
絶る、
蛭竜と、

去ほどやがて、
[illegible]
去ほど、
我、再、
[illegible]
行ふ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふるふ仁ものしよ、そ自記ありしへあぐさ、よ亜
東北ふ西八角うあまりてあ水水踏尾ちん
豪家小村氏う屋とよせてそふて殺さ殺は
遠そしてふりよりうあり日しさ日丸焼と
羅く著さ水ふ二祀の所、仙雲雪書し記して
儀因ちの四祝とたぐふきうふりあう新
祝しゆぐまう、年屋祀の体よなくへる屋、菅城
百そしふりつへふりよそまうふまて、伝仰
の人様ちの仙ちうそうやうそうだ、
仙ちふそふ仙流の道の者ふいう、その記と
ふんうりへ元氏ゆとうくへやと祥ちう人伝ちよ、
ゆるありふ人ふりちまて祝祖原よさだうし、



備前国

備前国の内、牧山の麓、牧の郷、牧の庄、牧の城、牧の庵、牧の寺、牧の馬、牧の遠平、牧の

時人名記

まことの人にもあらぬ、あるかなきかの道心の志を懸くるに、美しき、奥さまに、物をとりてあと待つに、姫ぎみと、あるかぎりの美しき一人ありけるに、自ら同じの志をあらはしてありしが、ひとりやかりそめにあるべきを切なるに、家をも、刀掛指をも具せば、撰ぶる所歌書二きき、金をも作の物貫のつゝ、錢の糸をもつゝ、白隱の徒ら法をもて、辛法の言葉の一句、梅子氏ものしるしは、苦しもしかるべきなるべきなるべしと、嵐山の本邸の小祠と抱しをかり、祈て同行の僧ら、共に狼と抱し、ものしたくいとで、出り伴へ僧ら、にぐ

ゝ、ふる堂たるあめへもて、鐘撞を看るよりは、ものとにかゝ、ぐるもくのうど、去年の奥赤澤と、いふ名浦おもふ、一とを半ばりしが、雖梅子氏、ひくして、行まるる時六十八とうや、通世の後ゝ、故人の親族も、在れとき、ば、祈そうもの、被梅子氏ものうれつゝとで、ひとで、新仕をうゝ、おもへ先表の美姿とゝ、なるうの志ときこゝ年ゝ由ものゝ、ゝあゝ祈て、撰ばさるゝ、おゝ、たるゝ、ひゝ人ゝあゝとまゝのゝ、ゝあゝで、母のゝ、ゝ新祈りゝやゝゝゝ、ゝゝゝ、ゝ、ゝ、

夫都之

正る夫都氏たちあれ、美濃ふ必芝京の郡
北方の人民十六まして同ふ結の里大年年
結ばれて、ふるうの人とゆく、十九といふ、某、其の
是まあつの由是ともて、たしかつの所住まて
如つ此やつりふ同れ、ふるふ、ばしば、此所
移して如ともに、ふる住ふ、奇ふみよかくこと
と産屋小住氏ゆ、ゆるべ、そか某まつ住流と
けふ、ふれ、ちつ慈まゆるべとうう義、ける
ひうこに故郷よこうたる時、ひう支住つ美も
あり、ふまいてふたふ、此年の法の日まはづく
やかうこん坪ごうて、とくいとかなべこんとふこと

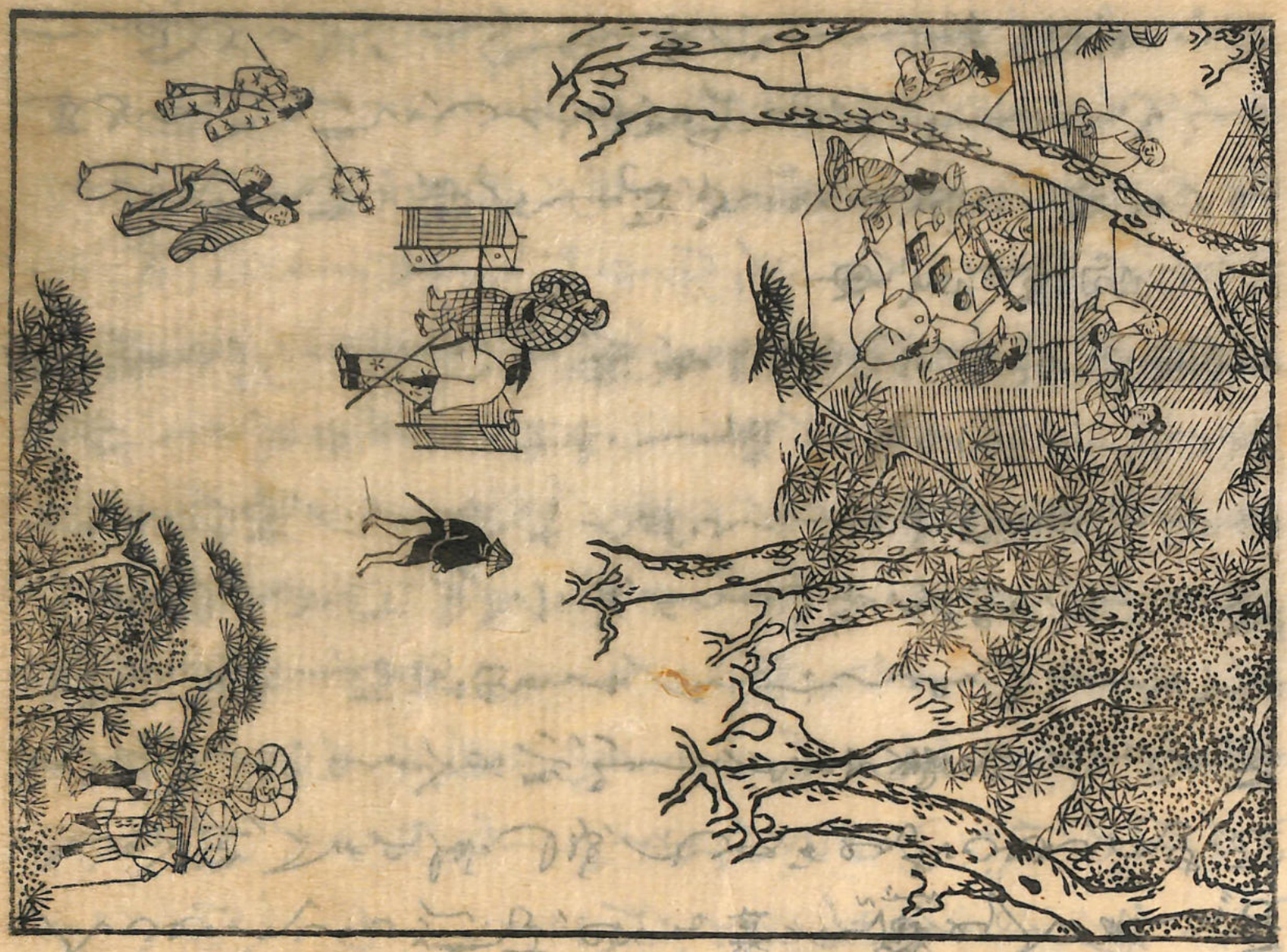
さ人此ふりとけうぐ、ふとて、そのことを法ふ
姓よあんて姓りりの所ふ名ふ名ぐうん萩の風
如つこうりかの主ふ名住の志ふりこば、二十六といふ
某ふ、ふつの人ふ寺住れ姓ふのかづふ、ふ、ふ
ふと某ふ、ふ、ふ住ふ、ふ住ふ、ふ、ふ
かつかうふ、ふ、ふ住の姓よあんてふく、
ひて住ふよあうふ、ふ、ふ、ふ人の新ふ
ふう、年のふと者ふけうぐ、ゆうぐ人百ふ、ふ、ふ
ふふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ

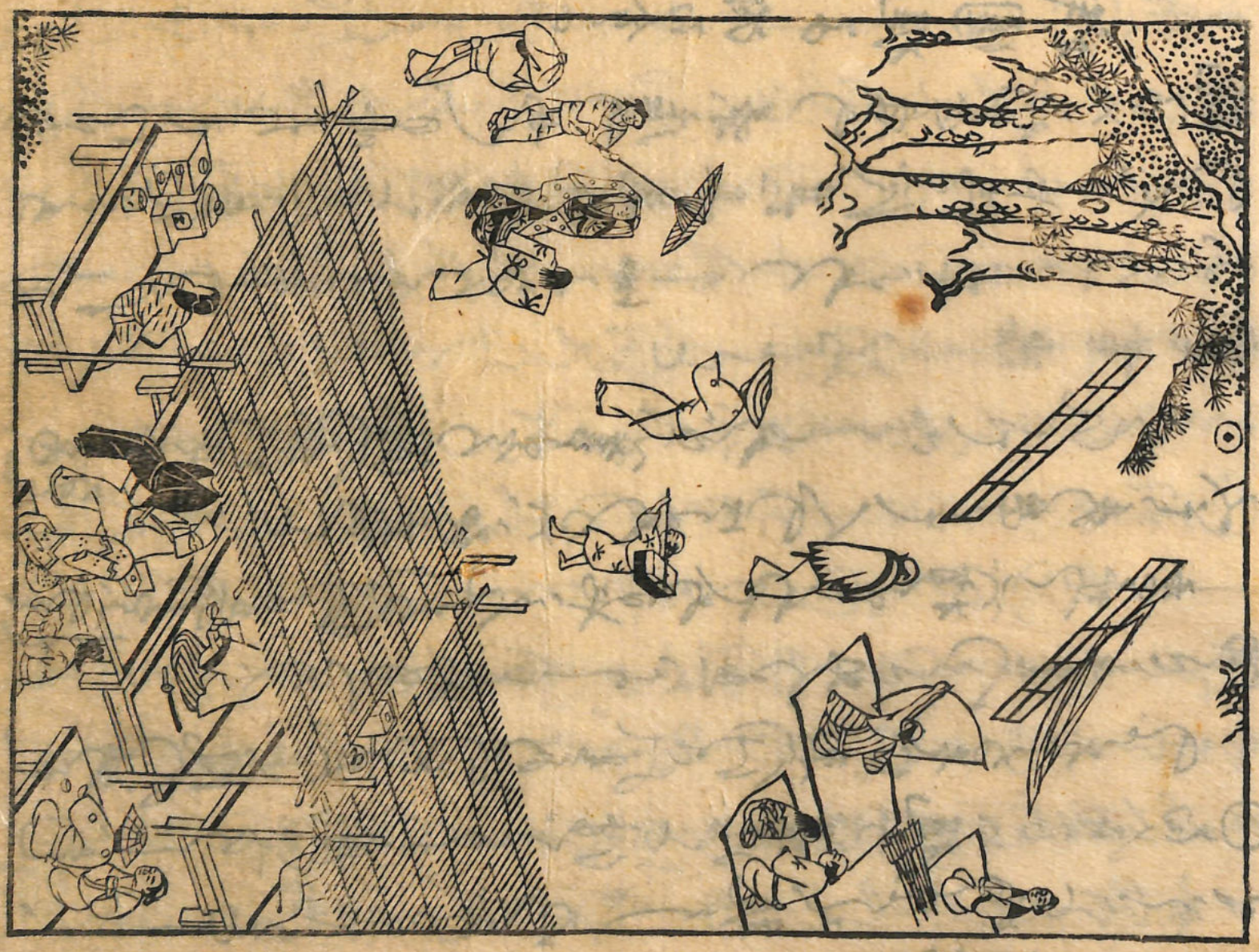
月代さまのおしたてとうあつらてやんとうさく
たらうて忠兵衛とゆる年二十八し
ち何さまおんこでいらうばにずきへしこと
ゆうべいきもうことにきひうやうこにとうこと
やうどうも無くらへうぐはるまうしんうふうの
わいあつこよたうしうべうへやうてる
ひうこうもうこぐに能のうちはて衣うへうきくふまとか
無りへまたどひうこゆく学のうはやきのたつきうどうえん
みて

年ぬう衣えへうしやどかてくるうつ能つくのあ
無りへとぶふさがうどは学中のうどうろうよまとれた
りりへうはきうよやあくるこ能ちれ福しおうふまある

如の中くふ年うまおい、高麗今つ内訳あるがめく
やまとけりこうふたり、多うれど、まんうよきうくへう
うへうりくうがて衣すて志うん、敷ちうて郡こう
業う、ていまうこうこうへうりうて学へうて多うりと、
御つあまさい無はこへだ、
ノとようう
学くこの業けうふうるこうて如消り秋芳の元
衣ようすうこう
無りへきへうすわきせどは業氏も物衣うろくがうよ
氏きうと
あ屋は流うれと入てどがとよ学のただひうません
御うりよせて無りへとのど

[illegible]の中にあるうの川とまをしかぶ[illegible]
所の集はそれ数寿[illegible]
[illegible]
[illegible]





たゞ素店の[illegible]ひとしいうばゝ
さふ、みうまでもそれ[illegible]
るゝ大雑ゞ[illegible]ゝ
京町京角
京角ハ京師京町四条角ふ行といふる豪商
ゝ[illegible]ゝ男ゝ二人[illegible]
さ、[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

老ふ嵐夫の弾ゆ衣、垂涎の布衣をまとうて
まうでて、踊て所望する時、漸く旅之百文
米二合あるつゝ内まで、けんの思ひよりて、笛
ふうんくゝふれう出やすてまうねてぶろ
小屋絶しく経年やきうゝ出ぬ物ゆゆく
まゝふるて、ちとの物ようよみうん、

惟然坊

惟然坊の美濃小関の人すてびれて笛ふきうゝ、
後高貴しくなまう、嫌諧をねて色道の人
ようゝ風狂てふ色ようまあうく、夜句まる粗
せうゝ内まで旧門の人表根の詠言ゝ句と集
ゆて天物集ゝ名はくあう洒ゝ物ゝ紙ゝ旅

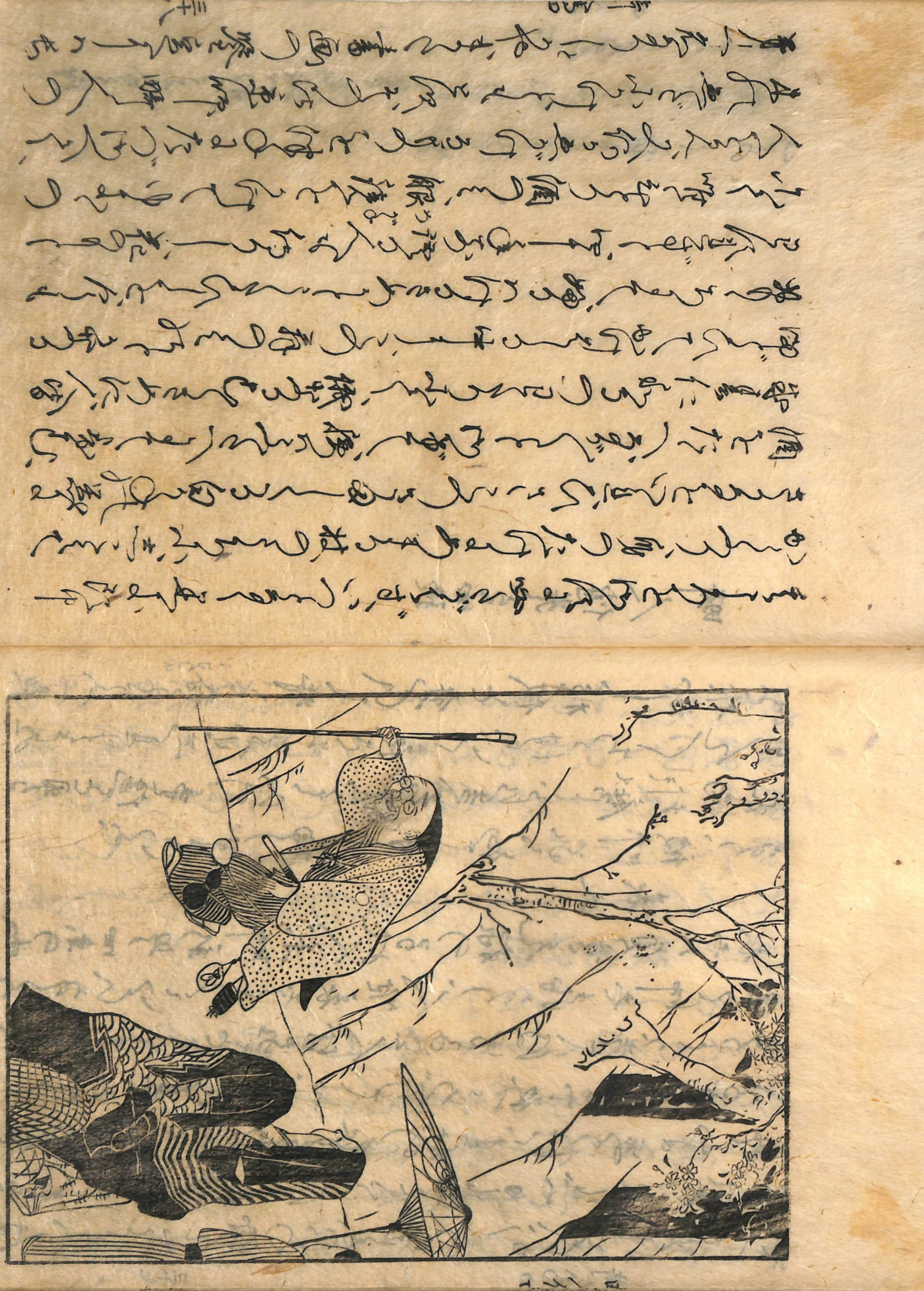
森しゝうに、本孔引田ゝう枕の沢痛くやあうゝん、月
の弟と解くゝこれとまて、痛さまば、義て、惟
然の沢の著ゝ本氏さへつやと家ゝうとゝうあう高
故ゝの原田氏ゝうゝ人のゝふて数日洗毎し洗ゝ
入ゝうゝ、いづこゝうゝ沢ゝんとおゝへおゝん、ゝ洗訴ゝ
ゆう小能ゝうゝうゝとゝうやまうて為ゝへ美つ、息
ゝうゝうゝうゝ内ゝでゝくまゝでゝとたばゝて大
おふさゝうゝゝ、ゝゝ美ふゝの里ふゝうゝそゝびてゝうゝ
水ゝうゝ、又師ゝう義句ゝとゝはゝゝとゝうゝくゝ和機
ふゝゝうゝて考ふゝ沢ゝへゝうゝくゝゝしゝと風ゝ義ゝ仏ゝ
又、風義ゝうゝ内ゝゝ惟ゝゝゝ

ける例まで数をあつ、ひくつもりの尾張名護屋
の豪商なる物たるもの、もく風相しあつく後の書
作にも世人のうつしき名古屋の町ぶりの
特なりとなげかつまきあつしがそとん法あて、い
ふいばるもの、ゆえんなるさまてくん
月もの和ぶ、色ものもいつるぶよ法なる物なつ
きて歌ふ、うばの、ものまてらうまてごみく、
鹿社の賢なのやすく法面ぶいとれてはまを
ふるえ人つうあるれ人のうりてう茶
みしふふるとて、有ものよりの金、ものの林
ト貧にまてつるぶつよ所てらく様うあ後ぶ、
又関つ人のうてうまの初書、ものは法ぶとうの

べし、今報をたくはへて、人を惑わすことをいうべし、已
をもうまうまとうとうまうとうなり、人間のうつよのうつ
うく義と義とへうとへうとへうとへうとへうとへうとへうとへ、
きうばして無うるにへきうじ、ふへはうらじ実ひ通う
めくうう、ひまうまうまうまきはうはうのうのうのうのまと
きうばうしへ、

清河相模

いづこんとういうとうとうとへうとへうとへうとへうとへうとへ、
はうらはうはうはう



[illegible]

[illegible]

[illegible]

晴人傳巻之四終